

LEADERSHIP CHALLENGE

大隈塾LCレポート vol.4

リーダーシップ・チャレンジ レポート vol.4

大隈塾リーダーシップ・チャレンジは7月12、13日、ワークショップ「政策シミュレーション」を行いました。

今回は、キャノングローバル戦略研究所の「PAC政策シミュレーション」に参加する形式です。PACとは「Political Appointee Candidates」の略称で、同研究所は民間から政府へ入って働く政治任用官の育成を行っており、企業やシンクタンク、大学で働いている有能な若手ビジネスマンや研究者を募り、定期的かつ多面的にトレーニングしています。そのひとつが「PAC政策シミュレーション」で、民・官から専門家も加わり、実際の政策決定過程に近いヴァーチャルリアリティ下でのトレーニングです。

今回のテーマは「邦人保護と危機管理」。201X年7月12日、東南アジアのモスコネシア共和国（仮想）で反政府デモが発生した。現地には日本企業、日本と現地との合弁企業があり、中国を始めいろいろな国との利害関係も錯綜している。現地と日本の政府と企業は、つぎつぎと起こる事件に対処し、問題を解決しながらそこで働く邦人の保護を進めていく、というシミュレーションです。

初日9時間、2日目5時間と、長時間に及ぶワークショップでしたが、大隈塾のみなさんも専門家と堂々と渡り合っていました。

<大隈塾メンバーの役割編成>

- 【首相官邸】内閣官房副長官（政務）
- 【外務省】外務副大臣、邦人テロ対策室長
- 【経産省】大臣秘書官、担当課長補佐
- 【警察庁】外事情報部長
- 【防衛省】統合幕僚長（空将）
- 【モスコネシア共和国】国防大臣
- 【J-Mosc=US（日・モスコ・米、石油開発）】広報部長
- 【国際石油開発（日本）】総務部長
- 【マルソン・シェール（米国、石油開発）】広報部長
- 【海洋建設（日本）】
- 【千代田エンジニアリング（日本）】広報部長

【クライシス・コントロール（PSC、現地危機管理会社）】副社長、総務部長
【メディア】MHK政治部長



【受講生のレポートより】

官・民合同での政策シミュレーションに参加させていただき、普段では経験できない貴重な時間を過ごすことができた。現在の業務の中で、人命に関わるような判断を下す状況に置かれることはないが、物事を判断する際の、情報の集め方や自社や他機関との調整方法など、大変参考になった。また、日常接することが難しい、「官」の方とも交流し、いろいろなお話を伺えたのは、今後のリスク管理において非常に有意義であった。

=====

デモ対策とテロ対策は大きく違う、ここが不明確であった。経済支援と警備ユニットの交渉も延期となり、何も決定しないまま時間が過ぎた。

時間と情報の流れが、ここまで早い場所にいたことはありません。現実になしている方たちがおり、自分の甘さを感じました。

=====

警備計画を立案するにあたって、過去のテロの事例や周辺のテロ組織の活動状況まもとより、警備対象の地理的位置関係や所在国の政治状況、プラント建設に従事する人員数、各社との契約関係など様々な要素を加味しながら考えていかなければならない上に、完成した案をどの順番で各顧客へ相談していくかなど、

本格的ではないかもしれないが普段触れることの無い業界のため、勉強になった。

=====
事の展開が速いために、石橋をたたいて渡るといった考え方では、タイムリーに行動できないため、行動しながら考えることが必要であることを痛感した。また、いかに多くの情報を持っているかが重要であり、ゲーム開始当初は思うように情報収集できず、意思決定が遅れたケースがあった。

今回のシミュレーションは、会社内外での折衝等にも通じるものが多く、改めて高いアンテナで情報を収集し、その中から必要な情報を取捨選択し、スピード感のある意思決定と行動を起こすことの重要性を感じた。

=====
ゲームに勝つことが目的ではないとはいえ、今回のゲームで勝ち・引き分けの成果を出したのは「マルソンシェール」「モスコネシア政府」「経産省」程度と考えており、成果が出なかったことが率直に悔しいです（負けたと思っています...）。また、自身のミス・コミュニケーションは、その後のゲーム展開を大きく左右する要素となり、1～2日程度ちょっと落ち込みました。

=====
現地企業の警備計画に対して、自身は当初より厳秘情報というだけで、テロに関する外務省のみが知りえている情報を閉ざしてしまった。いま思えば、この時から官民連携において現地企業との情報連携を実施していれば、もっと綿密な警備計画が立てられていたと思う。結果、現地企業との壁が発生して、現地企業の警備策定の内容を外務省、警察庁、防衛省と協議しても、単なる情報共有に留まり、改善等の結果まで持っていけなかった。

=====
シミュレーションでしたが、危機的状況における政治家へのプレッシャーを体感できました。現実におけるプレッシャーはいかほどか、想像の域を超えます。

=====
正直、国の動きの遅さには驚くべきものがあった。前述したが決断をしないという判断を常に入れていたように感じられた。官僚のプロもいたであろうしNSCも参戦していたはずなのに、且つノーリスクのシミュレーションにもかかわらず

ず、情報収集に終始する姿が印象深い。決断をすることのむずかしさがあったのだと推察する。



(テロリストから社員を人質に取られた企業の記者会見)



大隈塾リーダーシップ・チャレンジレポート vol.4

2014年7月26日発行

大隈塾事務局（一般社団法人ストーンスープ）

村田信之 mura@ta2.so-net.ne.jp

169-0051 東京都新宿区西早稲田1-9-19 アーバンヒルズ早稲田207

tel:050-3558-7527 mail:stonesoup1010@gmail.com